

石岡を掘る8



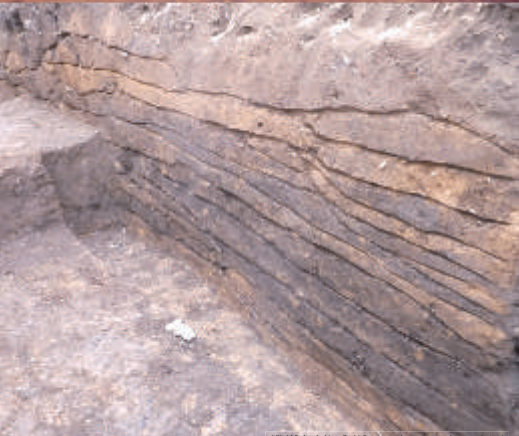
舟塚山14号墳



前原塚



前原塚



常陸国分寺跡 ガラムドウ地区



弥陀ノ台遺跡

令和4年

8月19日(金) ▶ 10月30日(日)
常陸風土記の丘 展示室

月曜休館 (祝祭日のときはその翌日)

午前9時～午後5時

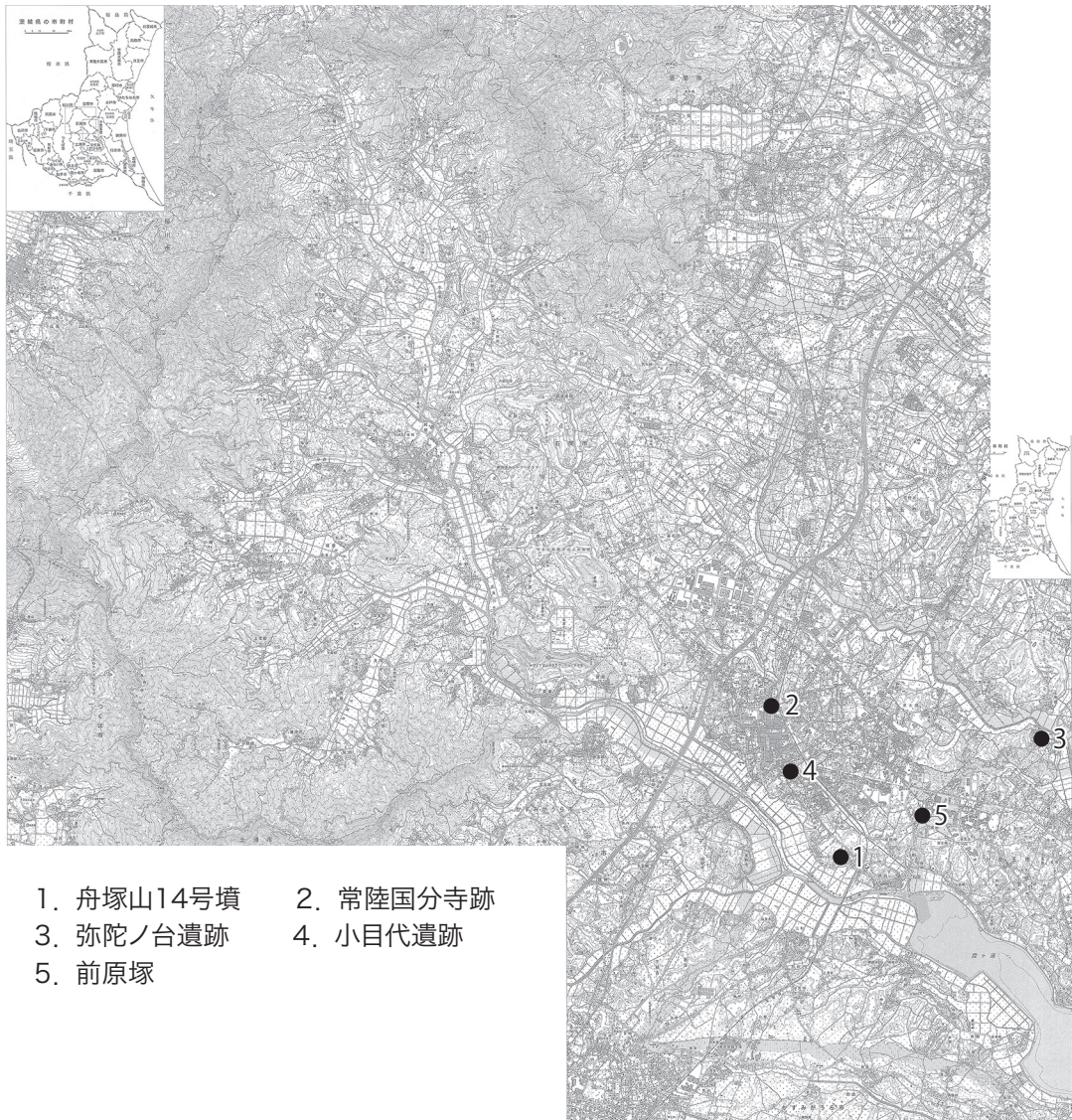
入園料 大人 310円 小人 150円

石岡市教育委員会 文化振興課

電話 0299-43-1111

常陸風土記の丘

石岡市染谷 1646 / 電話 0299-23-3888



1. 舟塚山14号墳
2. 常陸国分寺跡
3. 弥陀ノ台遺跡
4. 小目代遺跡
5. 前原塚

●例言●

本冊子は、2022(令和4)年8月19日～10月30日を会期として、常陸風土記の丘展示室において開催する「石岡を掘る8」に際して作成したものです。

展示および本冊子の執筆・編集は、石岡市教育委員会 文化振興課(谷仲俊雄)が行いました。

本冊子で使用した地図は、国土地理院数値地図25000から部分転載いたしました。

●ご協力・ご助言をいただいた方々●(敬称略)

佐々木 憲一 富田 樹 関東文化財振興会株式会社
明治大学文学部考古学研究室 有限会社日考研茨城

舟塚山14号墳

—舟塚山古墳の後継首長墓—

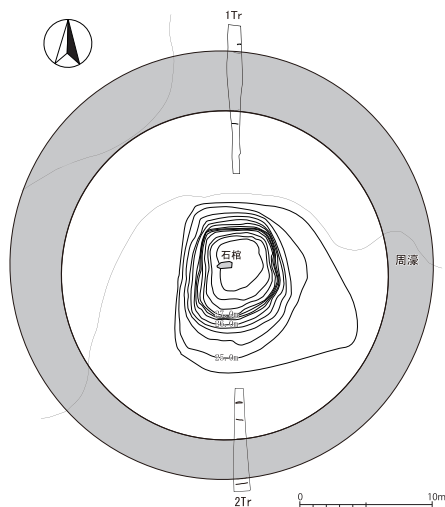
東国第2位の規模を誇る舟塚山古墳の南東約70mに位置する古墳です。昭和24年に石棺が発見され、石棺の中からは石製模造品が見つっています。

現在は径10m程度の小さな円墳ですが、もともとの規模や築造時期を明らかにするための学術調査が、令和3年8月、明治大学によって行われました。

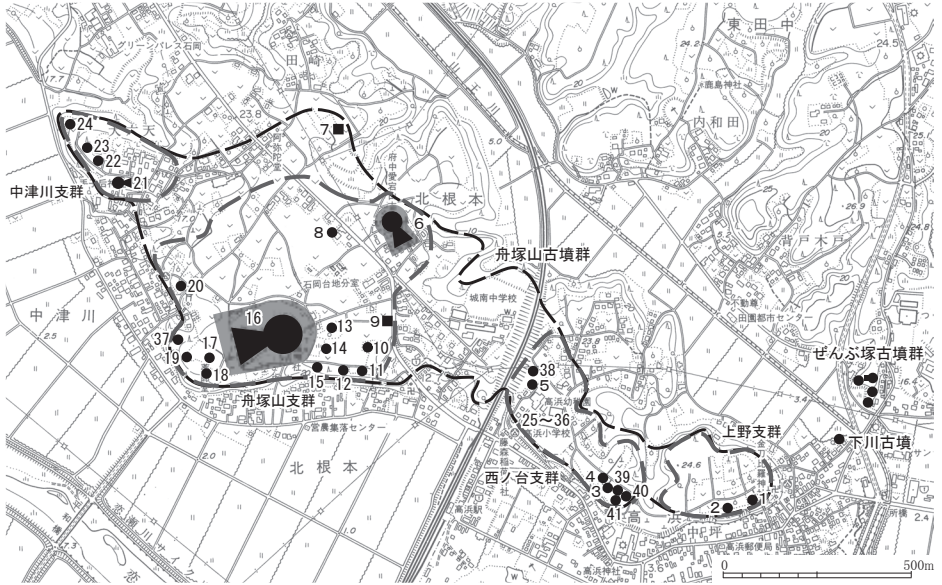
調査の結果、古墳のもともとの直径は31mで、円墳としては比較的大型な古墳であることがわかりました。また、60㎡の小さな調査にもかかわらず、3kgほどの埴輪が出土しています。

埴輪から考えられる古墳の築造時期は5世紀後半。舟塚山古墳は5世紀初めと考えられていることから、50年程新しいこととなります。

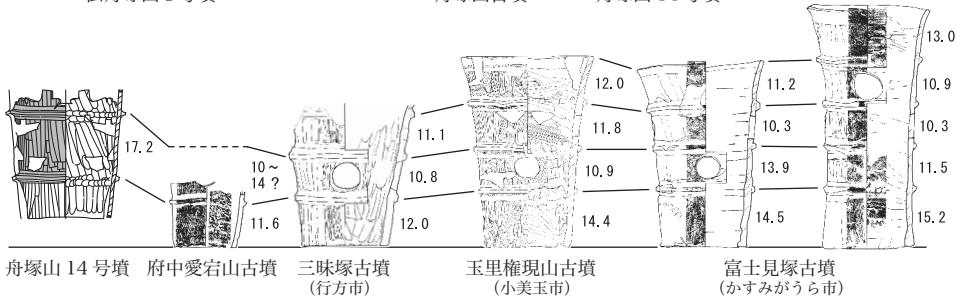
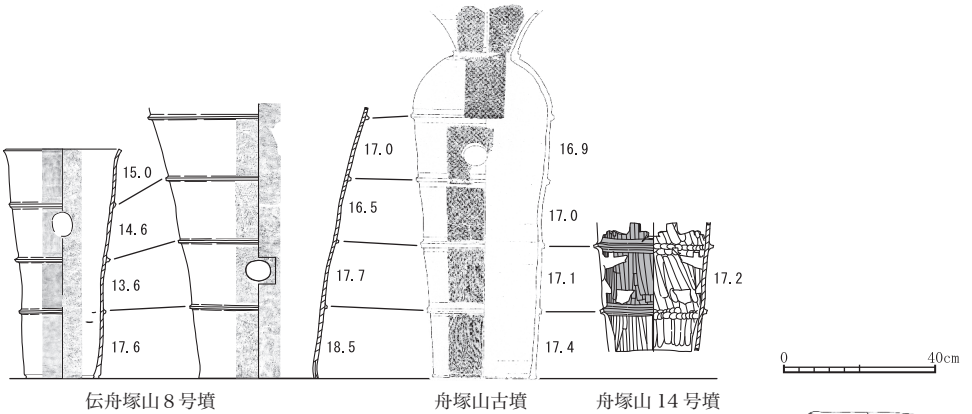
舟塚山古墳に後続する大型円墳—舟塚山14号墳の被葬者は、舟塚山古墳の跡を継いだ首長だった可能性が出てきました。



▲舟塚山14号墳 (佐々木憲一ほか2022)



▲舟塚山古墳群の分布図



▲舟塚山14号墳の埴輪と周辺の古墳の埴輪

(佐々木憲一ほか 2022「茨城県石岡市舟塚山第14号墳発掘調査報告」『考古学集刊』18)



▲舟塚山古墳の測量図とこれまでの調査地点

(佐々木憲一編 2018 『霞ヶ浦の前方後円墳』 明治大学文学部考古学研究室に加筆)

常陸国分寺跡

—塔跡の発見—

常陸国分寺跡は、遺跡の国宝にあたる「特別史跡」に指定されており、ちゅうもん中門・こんどう金堂・こうどう講堂・かいろう回廊・しょうろう鐘楼と
がらんといった主要伽藍を構成する建物が確認されています。しかし、塔については不明でした。



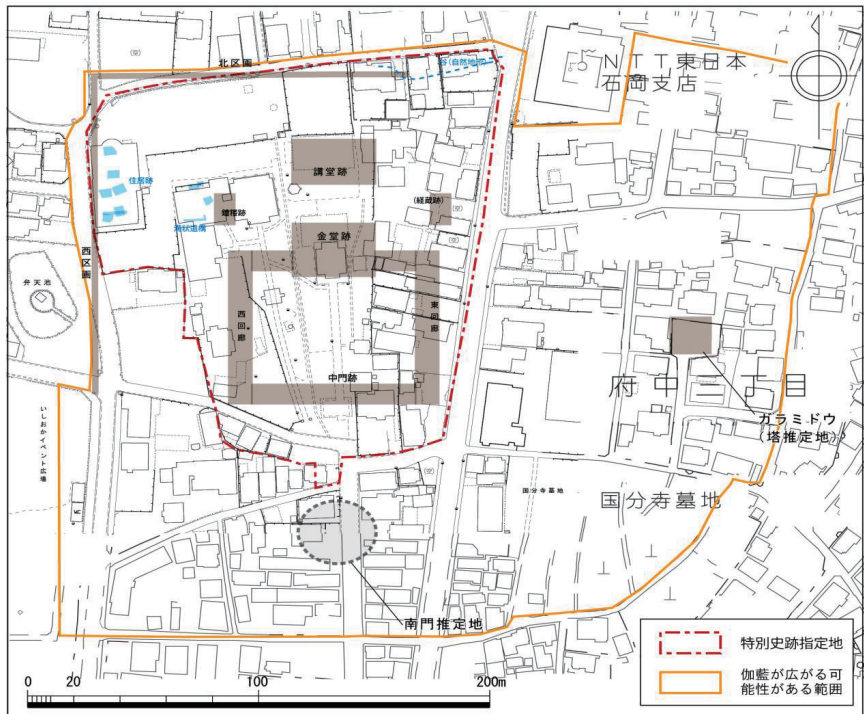
現在の国分寺の東側に「ガラミドウ」という地名があります。かつて3間×3間で中央に心礎と思われる石があったと記録されており、塔跡の存在が推定されてきました。しかし、その後建物が建設され、礎石も失われてしまいました。

令和元年、土地所有者の協力をいただいたことから、「ガラミドウ」の発掘調査を行いました。その結果、はんちく版築(地盤改良工事)



を持つ建物跡を発見しました。その規模は1辺15m以上。堅固な版築の状況から、国分寺の塔跡と考えられる建物跡の発見です。

▲ガラミドウで発見した版築(地盤改良工事)の様子



▲常陸国分寺跡と「ガラミドウ」の位置

(石岡市教育委員会2020『特別史跡常陸国分寺跡保存活用計画』)

その一方で課題も出てきました。版築(地盤改良工事)の土からは、9世紀中頃の土器が出土しました。地盤改良工事の土の中から出たということは、工事の際にその土器が周囲にあったということになります。つまり、地盤改良工事が行われたのは、9世紀中頃か、それよりも新しい時期ということになります。

9世紀中頃というと、国分寺の創建から100年近く後。「ガラミドウ」の塔は創建時ではなく、再建された塔ということになります。

その時期に塔を建て替えるとはどのような事情があったのでしょうか。そして、創建時の塔はどこにあったのでしょうか。

弥陀ノ台遺跡

—古墳時代～平安時代の集落—

道路建設工事に伴い、平成25～26年、令和3年に発掘調査を行いました。縄文時代から中世までの遺跡が発見されていますが、なかでも竪穴住居跡は計35軒も発掘されています。



竪穴住居跡の時期は、3～4世紀の古墳時代から10世紀の平安時代までの600年以上にわたっています。遺跡が立地するのは、園部川右岸の微高地と北向きの斜面ですが、住居跡が建てられる場所は一定ではありませんでした。

まず3～4世紀に標高11～18mの斜面の高いところに集落が形成されます。その後一時断絶しますが、7世紀になると斜面から標高8m前後の微高地にかけて広く集落が再形成され、8世紀



へと続きます。9世紀になると斜面部だけになります。掘立柱建物も建てられているのが特徴です。続く10世紀前半で集落は途絶えてしまいます。

▲奈良時代の竪穴住居の遺物出土の様子

弥陀ノ台遺跡

—戦国時代の前線基地—

幅5m以上、深さ1.5m以上もある大規模な堀跡も発見されています。南南西から北北東に延びていますが途中西に向かってます櫛形に屈曲しています。13～16世紀の土器・陶器が出土していて、中世の城館跡に伴う堀と考えられます。小井戸地区には「要害」や「東堀」といった地名があることから城館の存在が想定されていましたが、それを裏付ける初めての考古学的な証拠です。



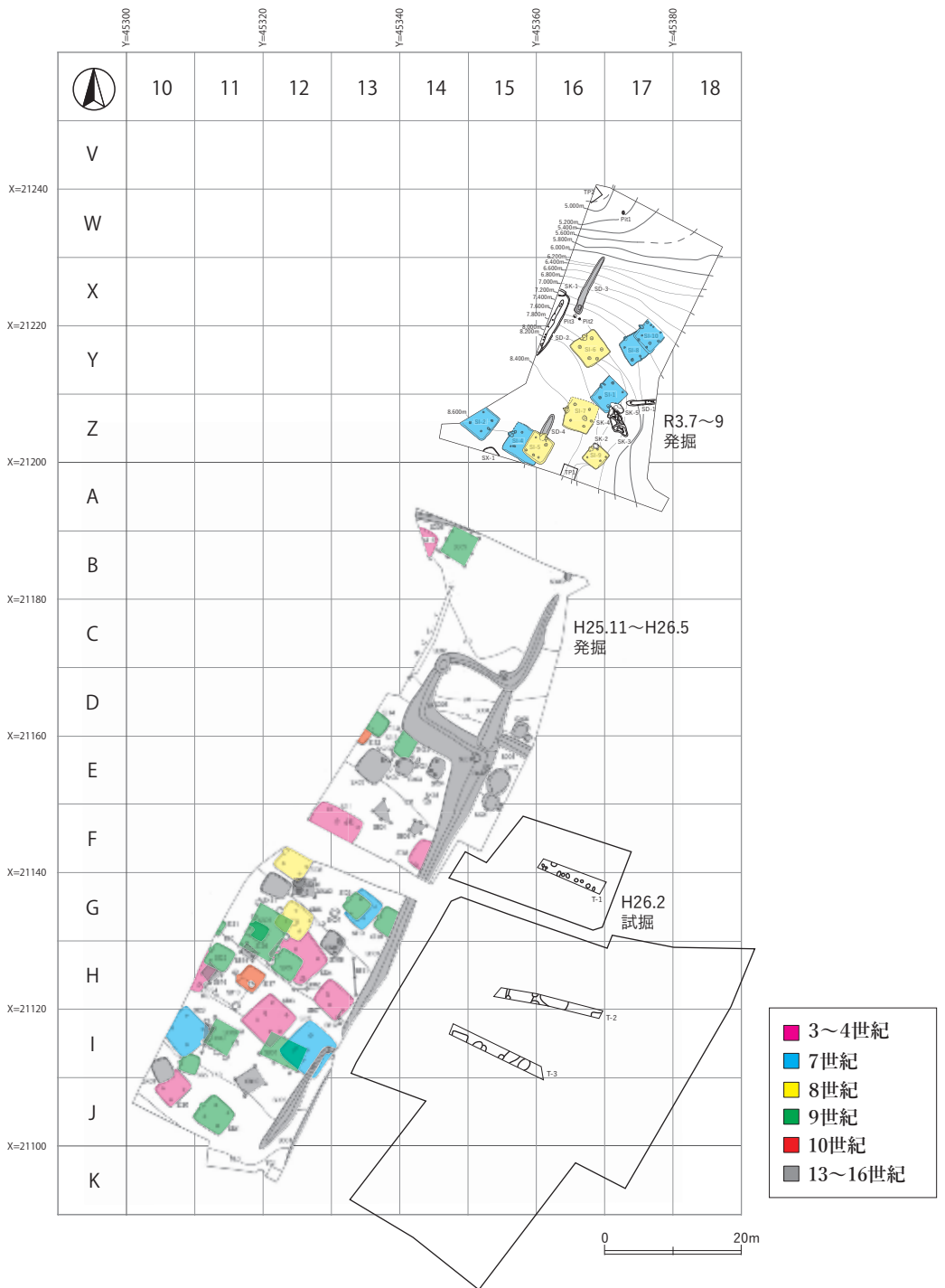
園部川をはさんだすぐ対岸には、宮田館跡が存在しています。戦国時代、府中城主の大掾氏と、小河城(小美玉市の旧小川小学校)



の園部氏は、園部川をはさんで対峙し、攻防を繰り広げていました。

宮田館は園部氏、弥陀ノ台遺跡は大掾氏の最前線基地だったと考えられます。

▲中世の堀跡



▲ 弥陀ノ台遺跡全体図

(有限会社日考研茨城 2014 『弥陀ノ台遺跡』 石岡市教育委員会、
関東文化財振興会 2022 『弥陀ノ台遺跡 2』 石岡市教育委員会より作成)

小目代遺跡(第6地点)

—茨城廃寺北の
空閑地?—

小目代遺跡は、古代茨城郡の郡寺・茨城廃寺跡の周辺に展開する遺跡です。これまで10地点以上の調査が行われていて、多くの遺構が発見されています。



第6地点は、茨城廃寺跡の寺域を区画する溝の北50m内外のところ です。区画溝の周辺では古代の竪穴建物群が集中して発見されていることから、第6地点でも多くの発見が予想されました。

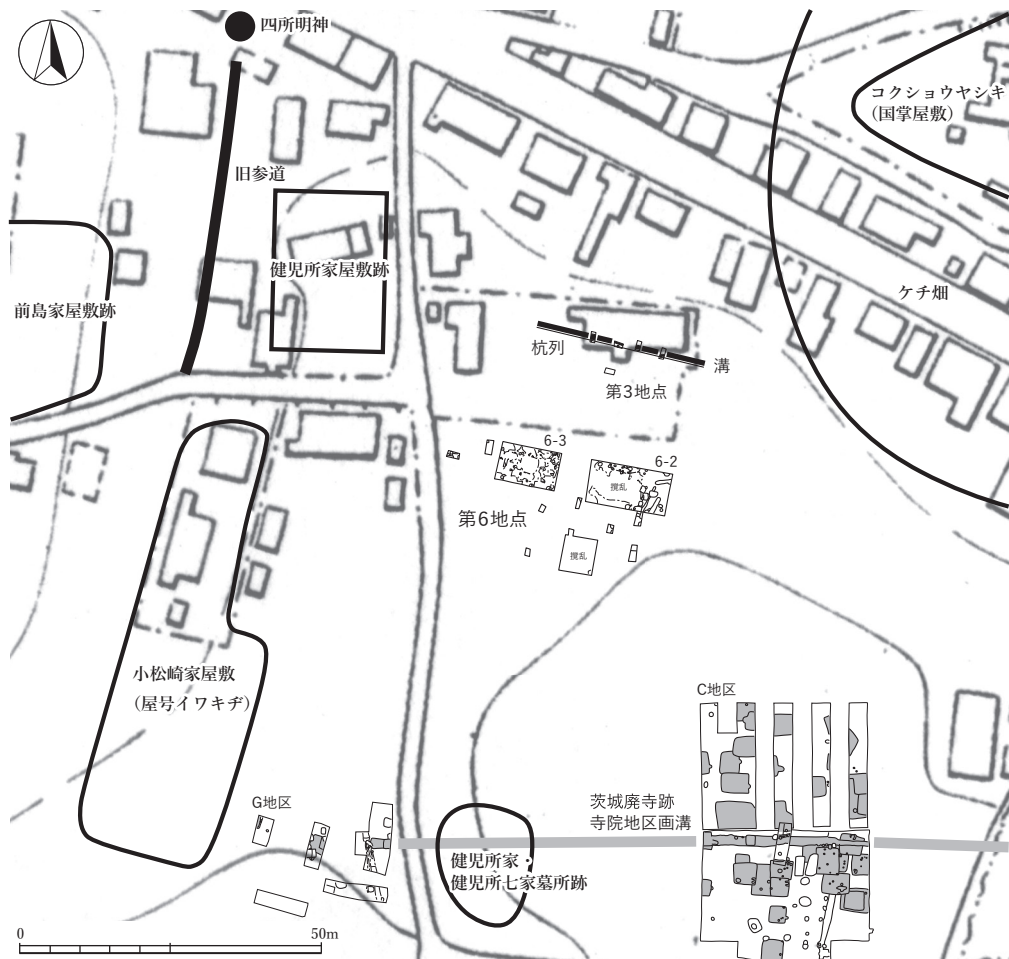
個人住宅建設に伴い発掘調査を行ったところ、発見できたのは径30cmから50cm程度の穴。予想されていたような古代の建物跡はありませんでした。調査区内は最近の掘削により破壊されている部分があったことから、その部分に古代の建物跡があった可能性はあります。しかし、遺物の出土も少ないことから、もともと建物が多く存在していたとは考えにくい、あったとしても非常に少なかったと推測できます。

遺構が密集する地点と希薄な地点。その違いこそが、遺跡の性格や意味を物語っているのでしょう。

なぜ「ない」のか—みなさんはどのように考えますか？



▲小目代遺跡（第6地点）の位置と周辺の地名・伝承
 （有賀和成 2004 ほか「常陸府中現況調査概報1」『茨城大学中世史研究』1に加筆）



▲小目代遺跡（第6地点）周辺の遺構と伝承
 （石岡市教育委員会 2022 『市内遺跡調査報告書』 8）

前原塚

—江戸時代の旅人を埋葬した墓と塚か—

石岡市の東端、小美玉市との境界付近に存在した塚です。令和2年、太陽光発電施設の設置に伴い、発掘調査を行いました。

塚は、径6m、高さ1m弱の小さなもので、盛り土も柔らかく、埋葬施設も確認できなかったことから、古墳やその転用ではなく、もともと「塚」として築かれたものであることがわかりました。

調査の終盤、塚のすぐ脇で、ひとつの穴が見つかりました。大きさは1.3m程の方形で、掘り下げていくと人骨が発見されました。人骨は膝をくの字状に曲げて座った状態。40代の男性で、江戸時代のものと鑑定されました。

塚と墓穴のどちらが先かは、残念ながら調査ではわかりませんでした。位置関係からは両者が無関係とは考えにくいところです。

江戸時代、行き倒れた旅人を無縁仏として塚の脇に埋葬したのかもしれませんが。



▲塚の脇の墓穴と人骨の出土の様子



▲前原塚の全景(上)と盛り土の様子(下)

石岡市発掘調査速報展

石岡を掘る 8

令和4年8月19日発行

編集 石岡市教育委員会 文化振興課

発行 石岡市教育委員会

〒315-0195 茨城県石岡市柿岡 5680-1

常陸風土記の丘

〒315-0007 茨城県石岡市染谷 1646